



45年目のユリノキをみんなと ～大学とアートのつながり～



45年目のユリノキをみんなと～大学とアートの繋がり～

今年で群馬県立女子大学は、開学45年目を迎えました。

皆さま、「群馬県立女子大学」とは、どんな大学かご存じですか。

この企画を担当する私たち、文学研究科芸術学専攻の大学院生は、「ユリノ木物語 群馬県立女子大学の歴史研究」プロジェクトチームのメンバーです。私たちもこのプロジェクトに加わるまで、「群馬県立女子大学」のことをほとんど知らなかったといってよいでしょう。

本学の歴史を研究する中では、「そうだったの？」「知らなかった！」という感動の連続でした。開学記念樹がユリノキであることも「知らなかった」ことの一つです（写真）。

そして、この感動をもっと学内外の皆さんに共有していただき、少しだけでも「群馬県立女子大学ってこんなところ」と知っていただきたいという思いから、この展示を企画しました。

少し立ち止まると、大学には、さまざまなアートがあります。例えば、円形広場にある噴水も《あづまうた》という彫刻作品です（写真）。今回の展示では、群馬県立女子大学の45年の歴史を振り返るとともに、本学の日常風景に溶け込むアートを本学の特徴の一つと捉えて、ご紹介いたします。



開学記念樹 45年目のユリノキ
本学の正面玄関、2号館脇に現在2本植栽されている



ユリノキの花（5月～6月頃開花）
モクレン科ユリノキ属



半田富久《あづまうた》1982年、花崗岩、直径5m、高さ45cm
玉村校舎、円形広場

ユリノキ犬



ユリノちゃん



「ユリノ木物語」プロジェクト
イメージキャラクター

1980-2025



1980

群馬県立女子大学 開学（前橋市文京町校舎）

文学部国文学科、英文学科、美学美術史学科設置、開学記念式典挙行

1982

佐波郡玉村町に校舎移転



1990

美学美術史学科 実技棟 完成

1994

大学院（文学研究科）開設



2001

外国語研究所設置

2005

国際コミュニケーション学部開設

2007

新館（現在の2号館）完成



2009

文学部に総合教養学科を設置、大学院に国際コミュニケーション研究科を設置

群馬学センター設置

2010

文学部英文学科を英米文化学科に改編

2011

文学研究科英文学専攻を英米文化専攻に改編

2012

地域日本語教育センター設置

2013

文学研究科に複合文化専攻を設置



2014

キャリア支援センター設置

2018

本学の設置者を群馬県から群馬県公立大学法人に変更



2023

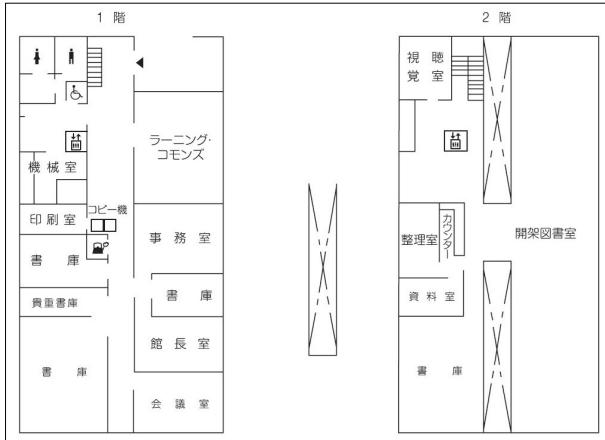
文学部に文化情報学科を設置（※総合教養学科を改組）

2024

国際コミュニケーション学部にグローバル・コミュニケーション課程
グローバル社会システム課程を設置（改組）

本学美術作品の調査（経過報告）

本プロジェクトでは、屋外彫刻の調査・保存活動のほか、2024年度からは屋内美術作品にも範囲を広げ、事務局提供の収蔵品リスト等をもとに、図書館などの屋内美術作品に関する調査も行っている。



図書館平面図(『2024年度学生便覧』43頁)



図書館入口及びエントランスホール(2025年1月29日撮影)

1階 エントランスホール、吹抜け、壁

オノサト・トシノブ

(Toshinobu Onosato, 1912-1986年)

『Tapestry B』1977年、捺染、布、120×80 cm、Ed. 100。左下にエディション番号「31/100」、右下に制作年「'77」及び署名「Onosato」

オノサト・トシノブは、本名を小野里利信といい、長野県飯田市に生まれ10歳から桐生市に住む。その後生涯にわたり桐生市を活動の拠点とし、日本における抽象絵画の先駆者として活躍した。

1930年代は、東京で津田青楓洋画塾、「黒色洋画展」、自由美術家協会で制作発表を重ね、時代の前衛としての存在を示し、1940(昭和15)年には、『黒白の丸』に代表される構成主義的な作品を発表する。戦争とシベリア抑留による1948(昭和23)年までの制作中断を経て、再び抽象絵画を探求した。1955年頃から、幾何学的な構成による作風を示し始め、1960年代には、鮮やかな色彩で錯覚的空間を作り出す特異な画面に到達する。

1963(昭和38)年に「第7回日本国際美術展」で《相似》が最優秀賞を受賞した。また、1964(昭和39)年には「グッゲンハイム賞国際美術展」、「第34回ヴェネツィア・ビエンナーレ展」、翌40年にはニューヨーク近代美術館の「新しい日本の絵画・彫刻展」、チューリッヒ市立美術館の「現代の日本美術展」への出品をはじめ、海外展へ数多く出品し国際的評価を得た。1978(昭

和53)年、文集『実在への飛翔』(叢文社)を刊行する。

(熊迫奈緒美)

参考文献等

小此木美代子「『歩きなおし』の1950年代—桐生・オノサト・トシノブ調査報告」大川美術館、小此木美代子編『生誕110年 みんなのオノサト・トシノブ展』図録、2022年、6頁

群馬県立近代美術館「主な収蔵作品 オノサト・トシノブ」URL: <https://mmag.pref.gunma.jp/works/onosato> (2025.01.27接続)
東京文化財研究所「オノサト・トシノブ 日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所) URL: <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9957.html> (同日接続)

本作品は、円弧と直線による幾何学的なパターンと色彩のリズミカルな配置が特徴である。これらの組合せによって大小複数の同心円が画面に形成されており、幾何学的な分割による抽象作品ながらもどこか薔薇の花を想起させる。《Tapestry A》と《Tapestry B》は各100部刷りで、本学の作品には「31」のエディション番号が付されている。

オノサト・トシノブは、1977年5月、現代版画センター主催「現代と声」展のために同センターから2種類のタペストリー制作を依頼された。「現代と声」展は、現代美術における新たな共同性の構築を目的としたもので、10月から翌年2月まで、東京をはじめ全国を横断して開催され、11月には現代版画センター桐生支部主催の両毛展でもタペストリーなどが展示された。

(藤沢桜子)

参考文献等

アート・スペース編『Onosato オノサト・トシノブ版画目録』1989年、143番【本解説の作品データは本目録にもとづく】
大川美術館、小此木前掲書、116頁
北川フランム編『'77 現代と声 版画の現在』現代版画センター、1978年、7、15、44頁

エントランスホール、左(東)壁(入口)

田淵安一

(Yasukazu Tabuchi, 1921-2009年)

『ハートの花びら-I』1981年、シリクスクリーン、15.5×10.0 cm、Ed. 1000。左下にエディション番号「61/1000」、右下に署名「tabuchi」
『ハートの花びら-II』左下にエディション番号「54/1000」、右下に署名
『ハートの花びら-III』左下にエディション番号「93/1000」、右下に署名
寄贈者: 第8回卒業生一同
[1991(平成3)年3月卒業]

田淵安一は、1921(大正10)年に北九州市で生まれた。東京帝国大学(現東京大学)文学部美術史学科でフランス絵画を研究しながら新制作派協会に出品を続ける。1951(昭和26)年にパリに渡り、当時のヨーロッパ美術界の中心であった抽象表現主義に傾倒し、厚塗りのマチエールの作品を描いていく。理知的でありながらも奔放な色彩に溢れた独自の絵画世界を開拓し、根源的なテーマを考え続けた。また、田淵は著書も数多く、長くヨーロッパに在住することから東西文化の根底に内在する普遍的な造形や人間の精神史を語っている。長きにわたる

制作活動では、2002(平成 14)年に北九州市立美術館で「田淵安一展」、没後2014(平成 26)年に「田淵安一 知られざる世界」展が開催された。

本作品は、ハガキサイズの連作になっている。田淵の特徴である極彩色のタッチや抽象的な作風で、華やかな印象を抱く。

(須永真緒)

参考文献等

神奈川県立近代美術館「田淵安一 知られざる世界」URL: <https://www.moma.pref.kanagawa.jp/storage/jp/museum/exhibitions/2014/tabuchi/> (2025.01.27 接続)

京都国立近代美術館「田淵安一 作家略歴」URL: <https://www.momak.go.jp/Japanese/collectionGalleryArchive/2010/history/tabuchi.html> (同日接続)

瀧脇千恵子『対話集 創造のつぶやき』精興社、2004 年、190-191 頁

エントランスホール、右(西)壁

大沢昌助

(Shosuke Osawa, 1903-1997 年)

《婦人像(A)》1982 年、14.5×10.0 cm、シルクスクリーン、Ed.1000。左下にエディション番号「439/1000」、右下に署名「S.Osawa」

《婦人像(B)》左下にエディション番号「543/1000」、右下に署名

《婦人像(C)》左下にエディション番号「548/1000」、右下に署名

寄贈者: 第 8 回卒業生一同

[1991(平成 3)年 3 月卒業]

大沢昌助は、戦前・戦後の社会背景を見据えつつ、独自のスタイルを貫いた洋画家で、明快な色調の抽象画で知られる。

明治 36(1903)年に東京に生まれ、昭和 3(1928)年に 25 歳で東京美術学校西洋画科を主席で卒業した。1954 年から 1970 年まで、多摩美術大学教授をつとめる。

教科書・童話本・絵本の挿絵を多く手掛ける傍ら、パリの「サロン・ド・メ」展、「現代日本美術展」、ブラジルの「サンパウロ・ビエンナーレ」展等、国内外の多くの展覧会に作品を出品した。平成 3(1991)年に東京都庁舎都議会本会議場前ロビーの大理石壁画デザインを手がけ、平成 7 年に 92 歳で「中村弊賞」を受賞。93 歳まで現役で新作を発表し続けた。

戦前から人物を主要なモティーフとし、堅実な写実を基本とする作品を描いていたが、1950 年代に对象の形態、色彩を簡略化してとらえ、画面上

で再構成する抽象的な作風に移行した。1960 年代には簡潔な線、明快な色面、大胆な構図による斬新な作品を描いた。

明快な色調や大胆にシルエットをとらえた婦人像は、晩年の抽象的な作風がよく表れている。

(出石暉織)

参考文献等

大沢昌助資料室ナギサ「大沢昌助の世界」

URL: https://osawashosukelibrary.com/?page_id=14 (2025.02.07 接続)

東京文化財研究所「大沢昌助 日本美術年鑑 所載物 故者記事」URL: <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10654.html> (同日接続)

練馬区立美術館「生誕 120 年 大沢昌助展」

URL: https://www.neribun.or.jp/event/detail_m.cgi?id=20230201675300347 (同日接続)

ラーニング・コモンズ、奥壁(窓側)

野田哲也

(Tetsuya Noda, 1940 年 -)

《79 年 12 月 19 日》1979 年、木版、シルクスクリーン、Ed. 100. 作品下部に「Diary: Dec. 19th '79」、エディション番号「69/100」、署名、押印

寄贈者: 島本融 元教授

(美学美術史学科)

野田哲也は熊本県宇城市出身の版画家である。1930 年代に日米で活躍した画家の野田英夫を伯父にもち、東京藝術大学に進学するまでを熊本県不知火町で過ごす。東京藝術大学名誉教授。

多色刷り木版と写真をベースにシルクスクリーンを組み合わせ、手漉き和紙の上に自身の日常の断片を描く「日記シリーズ」で独自の作品世界を作り上げ、国際的な評価を受ける。日記をテーマにしているため、すべての版画のタイトルは日付となっている。

自らの作品について、平成 26(2014)年に大英博物館で行われた個展 “Noda's World” にて「見る人の想像力をくすぐるような、抽象的なもの、ミステリアスなもの、ユーモラスな要素が好き。同時に現実的な配置のなかにどれだけ抽象的な要素を盛り込めるかということを見せたい」と語っている。

本作品は、「日記シリーズ」の 1 作品と考えられる。ビニールとリボンに包まれた、鉢植えの植物を描いた作品である。

(出石暉織)

参考文献等

不知火美術館「収集作家・作品紹介 野田哲也」URL: <https://www.museum-library-uki.jp/museum/collection/2022/04/71/>

(2025.02.07 接続)
版画家 野田哲也 公認サイト URL: <https://noda-tetsuya.com/> (同日接続)

ラーニング・コモンズ、右(南)壁

《アメリカ 1586》古地図

寄贈者: 濱口富士雄 名誉教授

(本学元学長)

寄贈日: 2013 年 7 月 29 日

全体の約 4 分の 3 をアメリカ大陸の地図が占めており、左上には大陸発見者とされるコロンブスと、彼を支援したカスティーリヤ女王イザベル 1 世の肖像が描かれている。また、左下には、コロンブスたちがアメリカ大陸に上陸し、半裸の人々にかしづかれた現地の王らしき人物が彼を見ている場面が描かれており、その下にはラテン語で「アメリカは、1492 年にカスティーリヤ王の名においてクリストフオルス・コロンブスによって最初に発見された」と記されている。アラスカ山脈の北あたりには、ラテン語で「アメリカまたは新インド」とある。それらの銘文は、オルテリウスの世界地図(1570 年初版)の北アメリカ大陸に記された銘文にほぼ相当する。

2013(平成 25)年 7 月、在日米国大使館から、アメリカへの理解を促進し、アメリカについて学ぶ機会を提供することを目的とした書籍が本学に寄贈され、現在のラーニング・コモンズの部屋に「アメリカン・シェルフ」が設置された。本作品は、そのオープニング・セレモニーにて寄贈された。

(藤沢桜子)

参考文献等

群馬県立女子大学『大学案内 2015』2014

年、45 頁 (アメリカン・シェルフ)

本学図書館保管資料 (セレモニー関連)



ラーニング・コモンズ

(2025 年 8 月 18 日撮影)

階段踊り場

クロード・ワイズバッシュ

(Claude Weisbuch, 1927–2014 年)
《男》(額縁裏面のラベルには《男の顔》とある)、カラーリトグラフ
寄贈者: 第 1 回卒業生一同
[1984 (昭和 59) 年 3 月卒業]

クロード・ワイズバッシュは、1927 年にフランスのティオンビルで生まれる。ナンシー国立美術学校で学び、版画の各種技法を習得する。1951 年頃から「青年絵画展」、「サロン・ドートンヌ」展、「エコール・ド・パリ」展、「時代の証人・画家」展等に出品し、1961 年にはクリティック賞(批評家賞)を受賞した。1968 年フランス版画家協会の専任会員に任命される。

版画家として新聞小説や書籍に挿絵を提供し、美術学校で版画を教えて生計を立てていた。美術や文学の古典に通じ、歴史上の人物を主題にした作品も多い。中でも、クラシックの演奏家を描いた作品が顕著である。彼の作品を展示したギャラリーの爲永氏は、「自身ピアノを弾くなど音楽の素養があったのに加え、動きをともなう主題であるところがポイントだ」と誌面で語っている。人物を鋭く素描する表現主義的傾向を持ち、動体描写の名手とも言える作家である。

本作品は、全体的に暗い画面の中で、人物の白く塗られた頭、首元、手が目立っている。肘置きに左腕を置き、どっしりと椅子に腰掛けているように見える。絵筆を走らせたような躍动感のある線が際立ち、「座る」という静的な行為の中に拍動のような動きを感じられる作品となっている。

(富井春来)

参考文献等

新潮社企画制作「フサロ&ワイズバッシュ 共に歩んだ画商が語る画家たちの素顔」
『芸術新潮』2019 年 6 月号、131 頁
ギャルリーためなが「クロード・ワイズバッシュ追悼展一開催概要」URL: <https://www.tamenaga.com/ja/exhibition/1271/> (2025.01.20 接続)

2 階 学習室(開架図書室)

川島猛

(Takeshi Kawashima, 1930 年-)
《宇宙遊泳(Space Odyssey)》(額縁裏面のラベルには《宇宙遊泳(黒)》とある)、シルクスクリーン
寄贈者: 第 2 回卒業生一同
[1985 (昭和 60) 年 3 月卒業]

[1985 (昭和 60) 年 3 月卒業]

川島猛は神奈川県高松市出身の現代芸術家である。香川県立工芸高校を卒業後上京、武蔵野美術専門学校油絵科で学んだ。1956(昭和 31)年「第 10 回新樹会展」、1957(昭和 32)年「第 10 回日本アンデパンダン展」に出品する。1958(昭和 33)年から 1962(昭和 37)年までは、「読売アンデパンダン」展と個展で作品を発表した。

1963(昭和 38)年に渡米、ニューヨークに定住すると、格子状に仕切られた正方形の中に増殖するアメーバのような形態を封じ込めた作風で注目された。翌年のクライスラー美術館での「新しい目」展や 1965(昭和 40)年ニューヨーク近代美術館での「現代日本絵画彫刻」展に出品した。1967(昭和 42)年にはニューヨークのワーデル画廊で個展を開催するとともに、ニューヨーク近代美術館の「1960 年代の選抜コレクション」展に出品し、国内外で評価を高めた。

本作品は、様々な色の不思議な形が黒色を背景とした画面全体に散りばめられている。作品名にあるような宇宙の無重力を感じる表現である。

(青柳理砂)

参考文献等

公益財団法人 川島猛アートファクトリー
「川島猛について」URL: <https://kawashima-af.com/interview/> (2025.01.26 接続)
徳島県近代美術館「作家詳細情報」URL:
https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=1&no=10030 (同日接続)

実技棟

2 階 デッサン室入口付近

分部順治

(Junji Wakebe, 1911–1995 年)
《髪》彫刻原型、1988(昭和 63)年
譲与者 群馬県企業局
譲受日 2019(平成 31)年 2 月 26 日

分部順治は 1911(明治 44)年 1 月、群馬県高崎市八島町に生まれる。高崎中学校を卒業後、建畠大夢に師事し、彫刻を学び始める。1929(昭和 4)年に東京美術学校彫刻科に入学し、このときから北村西望に師事し木彫を学ぶ。1934(昭和 9)年に東京美術学校を卒業し、研究科に進む。

多くの展覧会に参加し、1932(昭和 7)年の「第 13 回帝国美術院展覧会」(帝展)に出品した《母と子》で初入選を果たしている。1937 年の「第 1 回

文部省美術展覧会」(新文展)では《若い男》を出品し、特選となった。第 2 回新文展では《男立像》で特選、1968(昭和 43)年に「第 11 回日本美術展覧会」(日展)に出品した《新秋》が内閣総理大臣賞を受賞し、1981(昭和 56)年には日展参事となる。また別に、1955(昭和 30)年からは日本彫刻会にも参加し、1972(昭和 47)年に日本彫刻会理事となる。

分部は人体表現によって、季節や抽象概念をあらわした作品が多い。写実感を残しつつも、主題についてデフォルメを加える作風で制作されている。

本作品は 1988(昭和 63)年に第 20 回日展へ出品された。この作品も全体的に滑らかで、写実的だが緩やかにつながったひとつの塊のような作風である。主題である髪とそれに触れる手にはほとんど境目がなく流れのような表現である。

(渡邊まい)

参考文献等

東京文化財研究所「分部順治 日本美術年鑑 所載物故者記事」URL: <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10551.html> (2025.01.21 接続)

本学事務局保管資料 (譲与関連)

2 階 版画室

中林忠良

(Tadayoshi Nakabayashi, 1937 年-)
《囚われる風景III》1973 年、エッチング アクアチント メゾチント、45.3 × 56.5 cm、左下に鉛筆書き「ép d'ard'artiste」、右下に署名
《囚われる日々 - 扱曉》1974 年、エッチング アクアチント ディープエッティング、28.8 × 24.7 cm、左下に鉛筆書き「ép d'artiste」、右下に署名
《POSITION'83・野 4》1983 年、エッティング ドライポイント、30.5 × 23.4 cm、右下に署名

中林忠良は日本の現代版画界を代表する銅版画家である。1937 年に東京の大井で生まれ、東京藝術大学絵画科油画専に在学中に版画家の駒井哲郎に指導を受けて腐蝕銅版画に魅了された。同大学院美術研究科を修了後、版画教室に残って駒井の助手となり、その後は准教授を経て 1989 年以降は教授として勤務した。同大学名誉教授。

「現代日本美術展」や「国際版画ビエンナーレ」等、国内外の多くの展覧会に出品し国際的評価を得ている。

1973 年には「第 4 回版画グラン・プリ展」グラン・プリを受賞した

1995 年に増補版が出版された『中林忠良の腐食銅版画 アート・テクニック・ナウ 15』では危険性の高い腐蝕液の種類について語るなど、版画家の健康と安全に貢献する活動をしている。

本作品のうち、《囚われる風景III》のキューブに詰まつたものは「僕の身の回りにあるもの、拾ってきた貝殻や珊瑚の残骸、机の脇で枯れていった花、松毬、魚のミイラ、壊れた歯車や針のない時計」が挙げられる。《囚われた日々一払暁》はシロタ画廊の「Contestation 1974 銅版画五人集」のために制作され、「親元を離れて兄弟だけで疎開した雪景の悲しい明るさを表現した」作品である。「Position」シリーズは 1977 年の転機で、物質の手触りを再現しようと木片や桜の花弁など実物の転写を始めたのが始まりであると小倉忠夫氏によって紹介されている。

本学に所蔵されている 3 作品のうち、《囚われる風景III》と《囚われた日々一払暁》には右下に「ép d'artiste」の記載があり、作家保存分の版であったことがわかる。

(高橋くるみ)

参考文献等

小倉忠夫「中林忠良の銅版画業」中林忠良『中林忠良 銅版画集』阿部出版、1992 年、15-22 頁

中林忠良『中林忠良の腐食銅版画新增補版 アート・テクニック・ナウ 15』河出書房新社、1995 年

茨城県近代美術館 所蔵作品検索システム「中林忠良」

URL :https://jmapps.ne.jp/ibrkkindai/sakka_det.html?list_count=10&person_id=341 (2025.07.15 接続)



実技棟 版画室
(2025 年 8 月 18 日撮影)

円形広場、中央、噴水彫刻

半田富久

(Tomihisa Handa, 1936-2017 年)
《あづまうた》1982 年

花崗岩、直径 5 m、高さ 45 cm

半田富久は、群馬県碓氷郡原市町(現・安中市原市)出身の彫刻家である。大型の石彫作品を制作する「巨石彫刻家」として知られる。代表作に、筑波国際科学技術博覧会(「科学万博つくば'85」)の日本政府出展モニュメント《ゆるぎ石》(つくばエキスポセンター)、日本航空遭難事故のための慰靈塔及び広場《慰靈の園》(1986 年、群馬県上野村)などがある。

本作品は、1982 年の玉村校舎建設の際に円形広場に設置された。本校舎は、「地域に開かれた」空間の円形群と「学究の場として閉じた」空間の田の字型群(現在の 1 号館)というコンセプトのもとに設計されており、群馬ゆかりの作家による本作品は「地域」を意識した象徴的な存在といえる。

作品名の「あづまうた」(あるいは「あづまうた」)は、『万葉集』にもみられる東国の「東歌」を連想させるが、作品のコンセプトが述べられている記録等は発見されていない。

現在、水盤にはシャワーヘッドのように複数の穴のあいたノズルが取り付けられており、水は放射状に広がって華やかな印象を与えているが、制作当初のスケッチや写真ではノズルの噴出口は 1 つであり、噴出口からは水が 1 本になって上がっていたことが分かる。

(藤沢桜子)

参考文献等

藤沢桜子編著『2023 年度「ユリノ木物語 群馬県立女子大学の歴史研究」プロジェクト活動報告書』2024 年、群馬県立女子大学、19-21 頁

同「玉村校舎と地域とアート」(「女子大のとびら」)『広報たまむら』2024 年 3 月号、6 頁

「春の庭」

住谷正巳

(Masami Sumiya, 1936-2014 年)
《鳩(日時計)》1987 年、アルミニウム、石(台座)、高さ 124cm(台座 80 cm)
銘板:「寄贈 昭和 62 年 3 月卒業生一同」、「時差表」
寄贈者: 第 4 回卒業生一同
[1987 (昭和 62) 年 3 月卒業]

《春の庭と鳩》1987 年、紙(クレセントボード)、鉛筆、色鉛筆、25.7 × 36.4 cm、B4 判、《鳩(日時計)》のイメージスケッチ

署名:「MS '87」、裏面に「住谷正巳」の押印あり

住谷正巳は、群馬県群馬町(現・高崎市)出身の彫刻家である。アルミニウムなどを用いた機械的な金属彫刻で知られる。「市民に身近な芸術文化」を目指し、パブリックアートに力を入れた。群馬県内では、本学作品のほかに、前橋の商店街やグリーンドーム前橋のオブジェ、県立吉井高校の《ヤングドラゴン 2000》などがある。

日時計は翼を広げた鳥を象っており、頭と尾がそれぞれ南北を向くように制作されている。

スケッチは 2021 年の本学事務局資料整理の際に日時計の図面等と共に再発見された。桜咲く春の柔らかな日差しの中で、本学の学生が日時計を眺めている様子をイメージして描かれたのである。

住谷氏は、本学の日時計について以下のように綴っている。

県立女子大学の『鳩』1987 年作。同年に、社会に巣立つ卒業生によって寄贈された作品。翼を大きく広げて、天空を目指す銀色(アルミ)の鳩で、私は彼女たちの前途を祝った。永遠の時を刻む日時計彫刻で。

「私のアートガイド」『上毛新聞』
2001 年 11 月 8 日付より

「春の庭」の日時計は、2023 年 3 月における保存状態調査の結果、修復の必要があるとして本体と台座の石板一枚が取り外された。2025 年 11 月の現在も別の場所に保管されている。

(藤沢桜子)

参考文献等

住谷正巳「私のアートガイド」『上毛新聞』
2001 年 11 月 8 日付
藤沢上掲報告書、2024 年、31-32 頁



住谷正巳《鳩(日時計)》1987 年
(2022 年 3 月 28 日撮影)

「ユリノ木物語」プロジェクトについて

本プロジェクトは、群馬県立女子大学を研究対象として、本学の歴史的な価値や魅力を再認識し、学内外へ発信する活動を行っています。さらに、本学の未来設計にも関わっていくことを目的としています。玉村町校舎40周年の2022年に発足し、開学記念樹であるユリノキの周知や屋外彫刻の保存などの活動に取り組んできました。

なお、本学の歴史研究は大学の沿革を単純に整理するのではなく、学生や教員、職員の一人一人が物語の主人公であることから、研究課題を「ユリノ木物語」としています。



2024年3月4日

開学記念樹ユリノキに銘板を設置した



2025年4月22日

噴水彫刻《あづまうた》の表面洗浄を行っている様子

45年目のユリノキをみんなと～大学とアートのつながり～

[発行日] 2025年11月1日

[編集] 2025年度「ユリノ木物語」プロジェクトチーム院生メンバー：青柳理砂、熊迫奈緒美、須永真緒、高橋くるみ、富井春来
プロジェクトチーム代表：藤沢桜子

[表紙デザイン] 須永真緒

[キャラクターデザイン] ユリノキ犬：須永真緒、ユリノちゃん：青柳理砂

[発行] 群馬県立女子大学

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手 1395-1

[印刷] 東京カラー印刷

[表紙] 写真 開学記念樹ユリノキ (2025年9月11日撮影)

「ユリノ木物語」プロジェクトチームのロゴマーク (デザイン：寺嶋瑠奈)

本パンフレットの全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます。

※本プロジェクトは、本学「特定教育・研究費」(研究課題名：ユリノ木物語群馬県立女子大学の歴史研究)を受けています。